

備陽史探訪

第98号

発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

宮氏の素性

会長 田口 義之

室町戦国期、備後で最も勢いがあった国人衆は、宮一族であった。宮氏の名は、「太平記」巻三を初見として各種の記録に散見し、南北朝時代には既に大きな勢力を持っていた。中でも、足利尊氏・義詮方として活躍した宮兼信（下野入道道仙）は、貞治二年（一二三三）九月、尊氏に敵対した足利直冬（たけのふゆ）の軍勢をその城下に破り、翌年には備中国の守護職を拝領している。つまり、宮氏は一時的に守護家の資格を獲得していたのであり、その備後国内に於ける勢力は他の国人衆を圧倒していた。戦国期、毛利元就は、その備後進出にあたって宮氏の勢力と衝突し、激闘を繰り返すことになるが、それは故なきことではない。備後を支配しようとする者はこの宮氏を屈服させることがその前提として必要であったのである。

さて、このように中世備後の歴史に大きな足跡を残した宮氏の一族であるが、その出自は杳として謎に包まれている。

宮氏自身がそれを記録に残さなかった訳ではない。永正一六年（五一九）、宮親忠はその父政盛の画像を画工に命じて描かせたが、その賛文によると、宮氏は藤原北家の小野宮実頼の子孫であって、「小野宮」の小野を略して「宮」と称したとある。しかし、一方で源姓を称した者もあつた。すなわち、早く応永度大嘗会記録によると、宮氏兼は「源氏兼」として称光天皇の大嘗会に奉仕している。これは、「萩藩閥閥録」八三有地右衛門家譜に、「先祖氏信は、軍功によって尊氏公より屋形号と源姓を名乗ることを許された」とあることや、備北西城の浄久寺に蔵する「宮景盛寿像」に、「宮氏は本来藤原姓であつたが、祖父の高盛公が源姓に替えた」とあるように、軍功によって恩賞として与えられたり、宮氏自身の「必要性」によって藤原姓を源姓に変えたのであつて、宮氏が本来藤

原氏一派「小野宮」氏の後裔であるとする伝承と矛盾しない。

◇

実は、私自身は、これらの記録や伝承にあまり信を置いていなかった。宮氏の本拠は岩品郡新市町一帯であつて、宮氏は備後の一宮「吉備津神社」と深く結びついて勢力を伸ばしていった在地武士と考えていたからである（これが現在の学会の定説である）。宮氏が自身で「藤原姓」を名乗っていたかどうかは、それほど問題ではない。吉備津神社という古代以来の有力神社を祭祀していた古代豪族の転身していった姿に違いはない、と考えていたからだ。

ところが、である。最近とんでもない史料に出くわし、この考えに再検討を迫られることになった。近年発刊された「東城町史」資料編に収録された「蔗軒日録」の次の記載である。

「平将門の乱の恩賞の廟議で、小野宮殿（藤原実頼）は、征東将軍藤原忠文の功を認めなかった。そのため忠文は怨んで餓死した。忠文の怨霊は小野宮殿にとりつき、その子孫は九条家（実頼の弟の系統、後の撰閣家）の「奴子」となり、武家に転身した。これが備後の宮氏である。ま

た、「平家物語」に出てくる奴可入道西寂は宮氏の先祖である……」（同日録文明一八年四月二十七日の条）

奴可入道は、「平家物語」に平家の部将として、源氏方の伊予河野氏によって討ち取られたとされる人物である。「源平盛衰記」には「奴可入道高信法師」ともある。

もしこの伝えが正しいとすると、どういうことになるか。奴可入道西寂は奴可を名乗っているように備北奴可郡（現在の比婆郡の東半分）を本拠とする在地武士と考えられるから、この伝えを信ずるならば宮氏の本拠もまた旧奴可郡一帯ということになるのである。

これは今までの考えを一八〇度転換させる重大な事実である。今日までの宮氏の研究は、宮氏の本拠が備後南部にあることが前提となっていた。吉備津神社との関係もこれがそもその前提であつた。これが覆されるのである。

◇

この史料の出現によって宮氏の研究は新たな段階に入ったと言える。私も二十一世紀を迎えるにあたって、気持ちを引き締めてこの問題に取り組んでいきたいと思う。

今帰り来ん

熊谷 操子

昼寝から目覚めた。といつてもまだ頭も目も、夢と現実の境を彷徨しているような頼りない私であった。それでもやっと右手を延ばしてテレビのスイッチを入れることはできた。

はつきりと目覚めていない眼に映ったのは、同じような小面をつけた二人のシテとツレが、同じ白い衣装で静かな動作を見せている能のシーンであった。

そのうち、ポンポンパンパンと小鼓と大かわの小気味よい囃子が入り出すと、端然とした揺るぎない構えがピタリと合い、白足袋が動き出す。なんといつてもあの見事な摺り足の運びは、歩きの芸術であり、能の演技の核心といえるかも知れない。中庸のテンポでの優美な舞のうしろから、

「……須磨の浦……」

という地謡の声が辛うじて聞こえてきた。途端に私はガバツと起き上がり、布団の上に正座した。その能が「松風」であることが、その時すぐ察知できたからである。

「熊野、松風と米の飯」といわれる

ぐらい、何度聴いても観ても飽きのこないことで有名な「松風」なのに、私は未だホンモノのこの舞台を観る機会に恵まれていない。

古書にも「事多き能」とあるように、謡にも型にも聴きどころや見どころの多い曲と聞いている。だからこの夢幻能を演じるテレビ画面に、いつしかピタツと吸いつけられていた。

ストーリーはもう後半を過ぎていくのだろうか。小面の下の喉仏の動きと、白足袋の美しい運びに気を取られていた私の眼には、塩屋に一夜の宿を求めた僧の姿も、その場に在ったのか無かったのか気付かなかった。また潮汲み車もその舞台上に在ったのか無かったのか、それも見えない。

「……またいつ世のおとずれを松風も村雨も袖のみ濡れて……」

と、涙を押さえるシオリを演じている。そのうち、松風(亡霊)は、おし頂いていた行平の形見の烏帽子と狩衣を身につけ、妹の村雨が止めるのも聞かず、しつらえてある松の木の間を廻り始める。

この狩衣の色が、私の大好きな渋い海老茶色、それに大胆な藤の模様がなんともいえず見事で、凛とした装束は演技をいっそう大きく見せて

いた。

「われも木陰に立ち寄りて、そなれ松のなつかしや」

と、松がまるで行平であるかのようになり、寄り添い、戯れ、物狂おしいまでに行平を懐かしむ動作から、やるせない女の気持ちがにじみ出て私の涙を誘った。中の舞から破の舞に移る妙が、能「松風」の見せ場かも知れないなと思ったりした。

やがて舞台の中央に現れ出た僧に、松風はしっかり回向を頼み、夜明けと共に姉妹は静かに立ち去ってゆく。そのうしろ姿と、

「松風ばかりや残るらん。松風ばかりや残るらん」

の謡曲が憎いほど融合して、私めのいちばん好きなシーンとなる。

「立ち別れ因幡の山の峯に生うる

松とし聞かば帰り来ん」

この歌は、百人一首にも登場するもので、作者は、平城天皇の皇子阿保親王の第二皇子在原行平である。ちなみに在原業平は異母弟。

文徳天皇の時、ある事件にひっかかり、須磨の浦の流されていたとか。一説には、何かのつつしみごとで自らこの地に引き籠もっていた一時期があったともいわれている。いずれにしても流謫に似た寂しい生活を

送っていたことは事実らしい。

その須磨から因幡へ転動を命じられた時に、別れを惜しんで作ったのがこの歌で、当時国守の任期は四年であつたらしいから、「今帰り来ん」

(すぐに帰って来ますよ)なんて言つても、そうおいそれとは須磨に帰って来ることは無理だつたらう。愛人との別れに行平自身も辛かつたであろうが、それにしても、

「今帰り来ん」

なんて、いくら親身の者に与える慰撫の言葉だとしても、こんな無責任な罪な言葉を残すから、おんな松風の嘆きが大きいのである。でも、だからこそ、憂き世をめぐるはかなさを歌つたこの曲が生まれたのであるが。

古今集に残る彼の歌に、

「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦

にある。この事実をふまえて、海士姉妹を登場させて作った曲である。

いつか友人と、探して探して、やつと訪れることの出来た須磨の村雨堂の前に、しばし無言で佇んでいたあの日のことと、

「今帰り来ん」

を信じて、ひたすら行平を待ち続けた海士姉妹の哀れとを重ねて、名曲「松風」を充分かみしめることのできたひとときであつた。

比婆山の御陵と熊野神社を訪ねて

種本 実

比婆山は広島・島根両県の境にそびえる標高一二五六メートルの山だ。十一月四日は朝から好天、絶好の紅葉見物兼史跡巡りの日である。午前八時三十分自宅を出発して、途中、東城インター手前の「道の駅」で小休止した私と次男を乗せた車は、十時四十分頃県民の森の駐車場に着いた。

登山道は周囲の楓の紅葉に囲まれて、秋を満喫できた。同じ枝でも、木でも日の当たる個所は鮮やかな朱であるが、日陰になるほどまだ緑が強い。道は数日前の雨続きでぬかるんでいる所もあるが、赤い落葉樹の葉が絨毯のように、靴を覆ってくれる。道の左手のせせらぎは、登るに従って小さくなり、深山幽谷といった風情を醸し出す。

「出雲峠まで〇・一キロ」の案内板に励まされ、いつの間にか白樺に変わった道を黙々と歩く。懸念された次男の足取りは意外に軽く、先を行くグループを追い越している。途中の道に腰掛けて、休んでいる人達を横目に、しんどいけれど、峠に登るまでには我慢しようとひたすら歩く。

と、男性三人組に追いついたので、「出雲峠まではどのくらいですか」と訪ねると、

「もう過ぎましたよ。地図はもっているの」

と心配げである。烏帽子山まであと二十分くらい、というので一気に目指すことにする。峠では展望がよいだろうからそこで休もうと、勝手に想像していた自分を反省する。やはり百聞は一見に如かずだ。

と、にわかには、展望が素晴らしい広場に出た。おむすび状の山の頂上を水平に切り取った跡のような原っぱである。烏帽子山の頂に着いたようだ。時計の針は十一時五十分を指している。麓から一時間半を要すると読んだコースだったが、休憩なしで登ったから一時間余りで着いた。

先着の人々が思い思いに昼食をとっている。小学生もいる。何と幼児を背負った女性もいる。すきっ腹に染み透る匂いが漂う元は、携帯のガスコンロでラーメンを茹でているのであった。ウーム、登山家の必需品か、こんな高い山の中でも熱いラーメンが口にできるなんて素晴らしい。

われわれは冷たい弁当を広げる。すぐ東にそびえる、真っ赤に紅葉した三角形の整った山が吾妻山だと、どこからか聞こえてきた。山々をバックに盛んにカメラを構えている。北の山脈が重なり合った先は日本海だろうか、感傷に浸っていると、「すみませんがシャッターを押してもらえませんか」

と、一人の男性が声をかけてきた。それではと、私たち親子も、吾妻山と、遠く北西にかすんで見えるのが大山だと教わりつつ、山を背景にシャッターを二枚押していただく。肌着が汗で濡れ冷たい。脱いでリュックにしまおう。着替えが必要だった。三十分休んで、「御陵」の案内板に沿って歩く。大きな岩々から大木が生えているのが奇妙なので、次男とともにしばし見とれる。後で分かったことだが、これらが磐境という御陵の神域を囲っている巨石群だった。二十分も歩くと、伊邪那美神が葬られたといわれる御陵に着いた。径六メートルほどの低い円墳の真ん中に巨石が横たわっている。その周囲はイチイの大木十本ばかりと熊笹で覆われ、円墳の周囲は木のクイと鎖で囲ってある。

南側が参道であり、通称「門母」と呼ばれているイチイの古木が両側にそびえていると本で読んだが、どの大木がそれであるのか分からなかった。とはいえ、辺りは樹木に囲まれてうっそうとした神秘的な雰囲気漂っている。

「古事記」によれば、伊邪那美神、伊邪那岐神の両神は淡路島以下の島々を国生みした後、大事忍男神以下、三十五柱の神々を生む。伊邪那美神は最後に火之迦具土神を生んだ後、みほと（女陰）を焼かれて死んでしまう。夫の伊邪那岐神は妻の死を悲しんで出雲と伯耆の国境の比婆山に葬った。「アア、吾妻よ！」と叫んだ場所が吾妻山だったとか。

比婆山は、黄泉の国（あの世）とこの世の境であるという。その伝承に基づいて、古代この地の人々によつて山頂の巨石を「御陵」と比定されたのであろう。

新聞の「紅葉だより」などでも「比婆山は神秘的な山」と紹介されているが、科学文明では計り知れない神霊を味わう場所は、慢性的なストレス蔓延病に犯された私たちにとって精神の安らぐ場所、心のオアシスといえる。

古代の為政者は大和にあって、日が沈む西方の出雲の国を黄泉の国とした。瀬戸内の陽に対比して、陰の烙印を押されたのだ。「表日本・裏



伊邪那美之神が葬られたという比婆山御陵

日本」の表現が、地方の表現として不
適当といわれるように、「山陰・山
陽」も的を得た形容ではないと思っ
たのは私だけだろうか。

「山があるから登る」というのが、比婆
山の場合、神の霊をたずねて登る人
も少なくないだろう。比婆山とは「尊
い母の意」であり、当地においては「尊
美古登山(尊山)とも、御山とも呼ん
でいる。明治初期には、参拝の人が後
を絶たず、全山が連日賑わい、参拝者
による草相撲が奉納されていたこと
もあったそうだ。

明治二二年(一八八九)に生まれた
美古登村は、昭和十七(一九四二)に
西城町と合併し村名は消滅したが、
美古登小学校、美古登郵便局など由
緒ある地名は今なお受け継がれてい
るのである。

比婆山の神霊に心ゆくまで接した
かったが、午後一時三十分を指して
いる腕時計を見ながら、折原峠へ向
かい、峠から駐車場の公園センター
までだらだら坂を下る。一時間ほど
かかった。振り返ると、今登ってきた
紅葉の山並みが午後の陽にきらめい
ている。次の見学地、熊野神社へ愛車
を走らせる。

二十分ほどで、白くそびえる熊野
神社大鳥居前の駐車場に着く。駐車
場の傍らに「イザナミ茶屋」と看板を

掲げた食堂があり、メニューの中に
「イザナミ井八百円」「イザナミうど
ん五百円」とあるのが面白かった。中
に入って、高さが十メートルはある
うかと思える大鳥居は何時頃建てら
れたのかと尋ねたが、厨房の二人の
女性は顔を見合わせ、サア…と言っ
て笑いながら首をひねるばかりで
あった。

額東には金色の文字で「比婆大社」
とある。和銅六年(七一三)まで比婆
山大神社と称していたが、嘉祥元年
(八四八)に熊野神社と改められたと
いう。古代から山頂の御陵墓の遙拝
所であったという。中世には大富山
城の宮氏の崇敬社となった。西城町
の数ある重要文化財に熊野神社の棟
札三枚があり、各々、文亀二年(一五
〇二)源親盛、永正十五年(一五二八)
源尚盛、天正四年(一五七六)源智盛
と宮氏一族と思われる施主の名が記
されている。

祭神は伊邪那美神である。本殿は
大社造の変形で出雲建築の様式くむ
そうだが、千木・堅魚木がないのが
奇異に見えて、ちょうど傍らにいた
初老の夫婦連れにそのことを言うと、
「そうですなえ」

と気がつかなかったという表情が
返ってきた。

神社の境内をとりまく森には百本

を越える老杉がうつそうと繁り、県下の大杉五十本中、当社中に二十六本あるそうだ。最大の杉は高さ八メートルで県下第二位である。これらの案内は境内に何箇所も立っている「古事記への路」と記された案内板に詳述されてあった。

杉木立をぬけ、随神門をくぐり、手水舎を過ぎると、尻尾を極端に高く掲げた狛犬が出迎えてくれた。拝殿で拍手を打ち頭を垂れる。賽銭箱の上に木作りの鳥が佇んでいるのが微笑ましかった。本殿横を登ると、花崗岩の巨大な岩石があり、頂に金蔵神社が祀られている。

巨岩は辺津磐座といわれ、神が降臨するとか、霊が宿るとか信じられた古代の祭祀場。熊野神社の前称である比婆大神社が創建されるまではここで比婆山御神陵の祭儀を行っていたそうだ。高さ五メートル、周囲二三メートルの岩の前で、往古にはどのような祭が営まれていたのだろうか。しばし想像をかきたてる。

さらに登ると二の宮、三の宮の社がある。各々の祭神の速玉男神・黄泉事男神は、「日本書紀」によれば、伊弉冉尊(妻)の死後、伊弉諾尊(夫)が妻の屍を訪ねた後の夫婦離別の際、伊弉諾尊が吐いた唾から生まれた神と、掃きはらったとき生まれた神で

ある。

「日本書紀」では伊弉冉尊は比婆山ではなく、紀伊国・熊野の有馬村に葬られたという。記紀に若干の相違があるのは物語と史書の性格だろうか。伊弉那伎神・伊弉那美神の傳承は「古事記」「日本書紀」に記された神話である。とはいっても、記紀を編纂した千三百年も前の古代の人々には、それなりの原形があつたに違いない。それは、二十世紀末IT革命が叫ばれている現代に生きる我々には、計り知れない世界観・宇宙観からの創造だろう。

この先、那智の滝までは三十分は要するといつのでUターンしてそろそろ家路につくことにする。今日の日程は、来春四月の例会の下見でもある。山登りの縦走コースなら比婆山から熊野神社に下るコースも一考だが、老若男女大勢ではそれは無理だろう。

そんなことを脳裏に浮かべつつ、何時の間にか車は中国山地を下って夕闇の中に、福山の市街地のネオンが見えてきた。高一の次男は後部座席で寝息をたてている。久しぶりの親子の旅だったが、文句も言わずに一日付き合ってくれた息子に感謝感謝。次回こそは家族の希望を優先するとしよう、必ず。

創立二十周年記念特別企画 常城推定地を探る

二十周年特別企画として今年一月二三日に実施予定ながら、無情の雨によって中止となった「常城推定地を探る」が不死鳥のごとく蘇りまし。リベンジです。

常城そして茨城を探し出す―これこそ備陽史探訪の会の原点だということをお皆さんはよくご存じのはずです。奮って(震えて)ご参加下さい。

【実施要項】

〔期日〕 十二月十七日(日)

〔集合時刻〕 午前九時十分

(雨天中止・時間厳守)

〔集合場所〕 J R 福塩線府中駅前

〔講師〕 七森義人さん

(古墳部会評議員)

〔参加費〕 会員六〇〇円

一般八〇〇円

(資料代・傷害保険料を含みます)

★交通費は各自の負担です。また、別途にタクシードが相乗りで四〇〇円くらい必要です。

〔募集定員〕 限定五〇名(先着順)

〔受付開始日〕 現在受付中

★申し込みは事務局に電話でお願いします。まだ人数の余裕があります。が、実施直前ですので急いでお申し込みをお願いします。

〔主な探訪予定地〕

古代山城として名高い常城の推定地を歩きます。七ツ池、亀ヶ岳周辺(青目寺跡の礎石群・旗立岩・土塁推定線等)を見学します。

常城推定地の見学は詳しい人の案内がなければできません。あの日とき悔し涙を飲んだ皆さんも、今回新たに参加しようと思う方も、まだ見学したことのない方にはぜひ参加をお勧めします。

なお、時間が余れば、うしの塔(平安時代末期の五輪塔)、日吉神社、金龍寺(伝吉田寺)も見学します。

〔注意事項〕

- ① 弁当と飲物を必ずご持参ください。途中、購入できるところはいっさいありません。
- ② 山歩きしやすい靴でご参加下さい。かなり雑草が生えています。相応の装備、服装でご参加ください。
- ③ 福山駅発八時一七分に乗車すれば集合時刻に間に合います(福山→府中、四八〇円)。
- ④ 当日はタクシードに分乗して七ツ池まで行き、推定地を見学。帰りは約一〇キロを歩いて下山します。府中駅帰着予定時刻は午後四時ころになります。

思い出紀行

三原散策

足立 捷一郎

平成十一年八月一日(日)、同僚とともに四人で三原散策に出かけた。天気予報とは異なり、小雨が降り出したが、三原に着いた頃やんだ。

三原の探訪は、東コースと西コースがあり、西コースから出発した。駅待合室隣の出入口より三原城跡へ登った。桜山をバックにした名城で小早川隆景が、永祿十年(一五六七)新高山城(天文二十年「一五五二」までは高山城、翌年以降は新高山城)よりこの場所に移り築いた城である。隆景亡きあと、秀秋、福島正則そして浅野家へと引き継がれた。

「三原城 新幹線に 場所とられ 周りの堀に 昔をとどめる」

ここを後に成就寺・淡島神社に向かった。神心山成就寺(臨濟宗)は、本尊は千手観音菩薩で、天正十一(一五九一)新高山城より隆景がこの地に移した。和尚さんにいろいろ説明を受けた。隆景内室の実父である一五代正平の菩提所である。

寺の左隣に淡島神社があった。成就寺の鎮守神である。

次に妙正寺に向かった。ここ無量

山正寿院と号する妙正寺(日蓮宗)

は本尊は十界大曼陀羅である。浅野三原城主の菩提寺で、城下と瀬戸の多島美を望む絶好のロケーションに建つ古刹である。境内にある陣鐘は村上水軍が船上で使用したものである。上端に懸垂用の竜頭と特殊な小筒のある朝鮮式の鐘である。高さ一・一m、口径六四cmで、天正四年(一五七六)に鑄造されたものである。ちょうど和尚さんが出かけるところで、残った奥さんにいろいろ説明を受けた。

本堂の左奥には、浅野の菩提として初代忠吉、二代忠長、十一代忠助を除く歴代の城主の墓が十二個ずらりと並んでいる。各墓にはそれぞれ法号並びに顕彰文が刻んである。高さ三・一六mの石造五輪塔である。

次に大島神社に向かった。妙正寺から南に下る参道を右折して西側の丘に登ると三原城鎮守の大島神社に着いた。俗に切立稲荷と称している。相殿には厳島大明神、小島稲荷、五社稲荷神社などが境内社として祀られている。稲荷・厳島両稲荷と記された正徳三年(一七一三)建立の石鳥居があり、その南に峠の地蔵があった。ここは秀秋の家老稲葉正成

の妻のお福(後の春日の局)が、沖を眺めながら、江戸に向かう夫正成

の無事を祈ったところである。海向こうに見える筆影山、竜王山が、雨上がりに美しく輝いていた。

つづいて宗光寺に向かった。ここ泰雲山宗光寺(曹洞宗)は、隆景が父元就と母を弔うために創建した古刹である。新高山城内にあった雲門山匠真寺(臨濟宗)をこの地に移築した。慶長五年(一六〇〇)福島正則の支配下に入った時、曹洞宗に改め宗光寺と改称された。

国重要文化財に指定されている元新高山城の城門が実に見事である。

この山門は四脚門切妻造本瓦葺きで、墓股等に桃山期の建築様式をよく残している。境内には鎌倉時代後期の永仁二年(一二九四)に造られた石造七重層塔があり、本堂西側の墓地には小早川氏に代わって三原城主になった福島正之とその母(福島正則室)の墓及び、福島氏改易後、三原浅野氏二代城主になった浅野氏初代忠吉の孫忠長夫妻の墓がある。

「山門のみごと際立つ 墓股

見下ろす墓に 香煙くゆる」

この雄大な山門をあとに石段を南に下った。途中明真寺(真宗)という小さなお寺に立ち寄った。

坂を下った所に、「ヤッサ饅頭本舗」があり、ヤッサ饅頭を食べながら一服した。小休止の後、小さな道を人

に聞きながら香積寺に向かった。ここ桂谷山香積寺(曹洞宗)は、本尊は釈迦牟尼仏である。ちょうど区画整理で道路を整備中のため、寺が半分解体されていた。

ここを後にすぐ北にある寿徳寺に向かった。ここ妙栄山寿徳寺(日蓮宗)の奥に「日蓮大菩薩」の供養塔がひととき大きく目をひいた。

よく訪ねて来られたということで、和尚さんが案内してくれた。境内には三原出身の維新の志士丹羽其の碑や、個人で管理している、三原出身の「槍の名手である」佐分利重道という武士の墓を教えてもらったが、名も聞いたこともなかった。

和尚さんに礼をいい、お賽銭も奮発して次の大善寺に向かった。

ここ増上山広慶院と号する大善寺(浄土宗)は新高山城の麓にあったが、天正九年(一五八一)この地に移された。本尊は阿弥陀如来(木造立像)である。

三原浅野氏第三代忠真の妻で、四代忠義の母月溪院の菩提寺として知られている。月溪院は三代將軍家光の御落胤で、春日局が御典医の娘として育て、三代忠真に化粧料五千石をつけて嫁がせた。月溪院の葬られたこの寺には徳川家の葵の紋が許され、本堂の瓦に三葉葵の紋がついて

いる。墓は宝篋印塔でひときわ大きく、目立つところにあった。

三原にすぎたるものが三つあると他藩より羨ましがれた。それは三万石にふさわしからぬ大きな城と、徳川家の「葵」の紋所大段幕、そして鈴木方衛という家来（日光東照宮の修復、難工事を十日間で仕上げた智者）である。そのうち城以外の二つはこの寺に関係がある。

柵内にある本堂賽銭箱前の階段に座り込み休憩した。が、本堂の仏様におしりを向けて座り、飲食している図をあとから思い浮かべ、赤面の至りと反省している。（合掌）

ここをあとに浄念寺、正明寺を見て、万福寺に向かった。このころから小雨が降り出してきた。道を聞きながら万福寺（真言宗）にいくと、法事の最中であつた。続いて釜山寺に行ったが、これも法事の最中であつた。ここをあとに三原八幡宮に向かった。

急な石段を息切れをしながら登って行った。途中、茅の輪をくぐり、ようやく境内に着いた。お宮参りで神主さんが祝詞をあげていた。終わった後、本殿に上がり神主さんに説明を聞いた。

次に行く法常寺への近道を聞き、細い山道をお寺に向かった。

ここ東日山法常寺（曹洞宗）は竹原小早川家の菩提所として建てられた寺である。元は天台宗で東日山法輪常転禪寺といい、天文八年（一五三九）隆景の養父小早川興景が曹洞宗に改宗した。位牌堂には竹原小早川家の位牌が全部祀つてあつた。この寺は隆景の葬儀が行われ、境内で火葬された所である。寺の手前の入り口の所に「小祠」が祀つてあつた。

法常寺を後に三原駅に向かった。途中、高隆山順勝寺（真宗）に行つた。ここは新高山城下にあつた臨濟宗の寺院で、文明三年（一四七一）田坂善元が真宗の寺に改宗したものを、隆景が三原城下に移したと伝えられている。天正十五年（一五八七）准如上人が立ち寄つたことから、上人ゆかりの貴重な品が数多くある。頼山陽の父である頼春水の勉学の寺としても知られる名刹である。出口のところ今日言葉が書いてあつた。

「今日は雨でも明日は晴れる
暗い心はくもり空」と。
つづいて正法寺に行つた。ここ亀甲山延命尊院正法寺（真宗）の本尊は千手観音菩薩であり、寺蔵の大殿若経六〇〇巻が国の重要文化財に指定されている。ここを最後に雨の中

三原駅に着いた。

昼食は三原名物のタコ料理を食べることにして、駅前通りにある料理屋「かわ蝶」に行き「たこ善」定食を注文した。主人に三原のことを聞きながら、タコ料理を食べた。一週間後には、全国的に有名な「ヤッサ祭」があり、店の前はヤッサ踊りを見るための桟敷席になるということであつた。

午後は東コースを歩くことにして、小雨の中、新幹線に沿つた道を東の山裾に向かつて約二十分歩いた。突き当たりの山に急な石段があり、息切れをしながら登つた。山の中腹に簡単な社があつた。そこが熊野神社であつた。この石段を半分降りた所から北に向かつて山道があり、古寺探訪コースの看板があつた。この山道に沿つて極楽寺に向かった。

ここ日照山無量寿院極楽寺（浄土宗）は日本四十八極楽寺の一つで、法然の法孫良忠が西国へ下向の時開山したと伝えられている。山門は新高山城の裏門を、三原城築城で移築し、三原城解体の明治十一年（一八七八）に移築したものである。桃山時代に作られていて、墓股の彫刻が見事である。

つづいて北隣にある松寿寺に行つた。ここ万年山松寿寺（曹洞宗）は

三原城築城以前からあつた三原一の歴史の長い古寺である。

三原の童歌に
「三原に寺は数々あれど古さが一の松寿寺」

と唄われている。境内にキリシタン灯籠と武者小路実篤の歌碑がある。本堂背後の米田山の麓に建てられた三重の塔が色鮮やかであつた。
「小雨降る 緑の木々に 囲まれて 朱色あざやか 三重の塔」

雨も止み、ここより少し北へ行つたところにある海南山道場院と号する観音寺（時宗）に行つた。

ここを後に石段を下つて、途中、浄楽寺、専福寺を見て三原駅に向かった。途中、酒処酔心山根本店があり、日曜日で閉まつていたが、学させてもらおうとベルを押すと、宿直の人が出てきたので、来意を伝えたところ、見学は行っていないとのことであつた。わざわざ来られたということで、記念品に漆塗りの立派な酔心名入りの酒升をいただいた。駅へ向かう道は、毎年二月に行われる、ダルマ市で有名な神明市で賑わう東町通りである。

途中、湧原川に架かつた大橋を前にした北の路地奥に竜松山善教寺（浄土真宗）があつた。ここを最後に三原の散策を終えた。

峰高くして鳥ならずでは通うものなしの 大富山城に登る

小林さなえ

十月一日晴天。四十二名の参加のもと「久代官氏の盛衰を辿る」という詳細かつ端的な資料を頂き、西城町に着くころには官氏一門の盛衰を学び、備北の歴史に思いを馳せて、大富山城に登り始めることができました。

大富山城本丸は、西城町市街地の西南にそびえる標高五一メートルの大富山の頂部にあります。山麓の東から南へと西城川が流れ、明神が丸(二の丸)との間は入江川を内堀とし、周囲は急斜面で、山城としての立地条件に恵まれています。南方にも出丸とは思えぬほど大規模な天神が平、物見が丸があり、一城三壘の大城郭です。

天然の要害ぶりは大手口から登り始めた私たちにも徐々に感じるところができました。大手道の間には、それを監視するためでしょうか、階段状の細長い曲輪が設けられています。急斜面を上下したり、横の通行には便利が良さそうですが、端は急崖になるよう削られています。

谷筋になると大手道は左右にカーブを繰り返して、中間の菊の段まで一

同慎重な足取りで登りました。右に左にと曲折しているところはやはり小曲輪が築かれています。大手口や山頂の本丸を意識して築かれていると本日の講師、小林浩二さんの折々の説明を受けながらさらに山頂へと登って行きました。

山頂の本丸入口に大ケヤキがあり、まるで一行を迎えているようです。本丸は平坦で広く、「頭上は五六反の平地也」は本当で、これを取り巻いて外側にはいくつかの帯曲輪をめぐらし本丸を囲んでいます。現在、本丸の周囲は沢山の紅葉が植えられています。

昼食後は守備施設全体の要の位置ある井戸を確認し、登りの時の大手道から搦手道に分かれ、急斜面の谷筋に沿って小径を通り、有名な大堀切に出ました。堀切から天神が平の尾根筋の道は昼なお暗い道で、昨日夕刻から夜にかけての雨で湿気をたっぷり含んでいます。木々の緑が目映えて山深さを感じ好きな風景でした。

天神が平の主郭近くでは、投石用のこぶし大や頭大の川原石を多く確

認し、物見が丸に進みます。露出岩塊が多くて歩きにくいのですが、見晴らしは素晴らしく、次の物見が丸壘まで大富山城防衛ための「物見」には最適の曲輪であることが分かります。

物見が丸の曲輪群や本丸のすぐ下に「能楽寺が丸」と呼ばれる平地があり、東城町久代から移した官氏の菩提寺である能楽寺があったといえます。ここは軍事的な曲輪としても利用したと予想できます。また、物見が丸下の急崖の尾根を切断して三重の空堀が設けられていました。

堅固な要害の山城の醍醐味を堪能し、大きな感動を密かに心に留めて林道を下りました。私の十代後半から始まった山登りは、現実からの逃避で山に入っていたのではないかと思われる感も否めないのですが、今は山城探訪しています。ほんとうに愉快です。

久代官氏の出自については、「久代記」(一六二〇年から一六七〇年代の成立と推定)に、初代利吉が応永六年(一三九九)大和国宇陀郡から備後国奴可郡久代の里へ来住し、一四〇年余住むとあります。「比婆郡誌」には、利吉が石清水八幡宮より勧請して久代高野八幡宮社を創建したとあり、また、菩提寺の能楽寺も創建

されています。しかし、「奈良県宇陀郡史」上では、中世武士団に官氏の記載がないようです。

備後南部の宮氏(兼信系・盛重系)は、既に久代官氏が奴可郡に來住した四四年前、すなわち文和四年(一三五五)、その勢力が奴可郡におよんでいたという古文書もあり、備後国品治郡新市の宮氏の一族とみる方が無理がないと推測とする人が多いようです。しかし、両者の系図上の繋がりには不明です。

六代景友の代には付近への勢力を広め、東城五品嶽に本城を構えるようになっていきます。西城町民俗史料館の展示では、タタラ製鉄の跡が多く、山砂鉄による製鉄は大きな財源であったようです。この地は伯備国境の軍事重要な地でもあり、西城への領土拡大の目的で大富山城を築城したものと思われました。

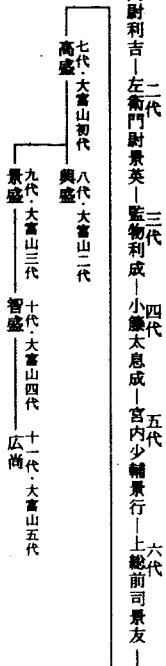
軍記本「久代記」(伊藤本、毛利家文庫本)は相違点はあるものの、初代大富山城主高盛から五代広尚までの概観は、二種の資料から築城天文二年(一五三三)から天正十九年(一五九二)の間、出雲国神門郡塩冶へ所替えまでの在城五十九年間が描かれています。その中で三代景盛時代が全盛期といえますが、毛利氏の中

久代宮氏は内外の形勢にかけりが見えてきます。この時代、戦いの連続で景盛は多彩な生涯だったと想像されます。

物見が丸の山裾の宮氏の菩提寺、曹洞宗三峰山浄久寺が、盛衰の跡を残してたたずんでいます。山門の扉は大富山城の北の城門の扉を移したものと伝えられ、古材が寺の歴史を刻んでいました。境内一面苔におわれ、静寂な空間が広がっています。堂の軒は高く、和様の要素が多い観音堂や鐘楼が建っています。県天然記念物のカヤ、そのカヤに根元からヤマフジが大樹に巻きついています。とても風格のあるお寺です。

本堂に入り、県の重要文化財に指定されている大富山城主三代（宮氏九代）景盛の寿像（生前に画かれた人物像）、浄久寺中興の覚海禅師寿像、宮氏の家老盛勝の肖像画と拝見させて頂くことができました。戦国時代の地方武士の画像は希有のものとのこと。景盛は四十代ころの働き盛りで、勇ましい顔立ちと思えます。

久代宮氏略系図



だが、私は全てのことを超越した表情を感じる覚海禅師に魅かれました。

住職のお話中、本堂のひんやりとした空気の中、すっかり心身を休め、このまま横になり、お昼寝（不謹慎な）をしたい気持ちを押さえて寺を辞し、山里の風景を満喫しながら帰路につきました。途中、西城川を挟んで山内軍と宮景盛軍と対陣した団司川合戦の場所を車中より説明を受けました。備北の名代官として

当地を知り尽くした頼山陽の叔父頼杏坪が七十四歳の時「一度團司川（團司川を渡る）」（一八二九年）を詠み、感慨を深くしていることも知りました。

木の間より洩り来る月の影見れば
心づくしの秋は来にけり
よみ人しらず（古今和歌集）



参加者全員で記念写真（大富山城本丸にて）

備前福岡・長船の

古代中世を訪ねて

佐藤 秀子

長船といえは有名な刀剣の産地で、訪れた時も、博物館で中四国の現代刀工展があり、刀工の方が展示説明をしてくれ、とてもよくわかった。

太刀は平安時代末期から室町時代初期まで腰に佩いて(吊して)用いたもの。刀は太刀に代わって室町時代中期(一五世紀後半)から江戸時代末期まで使用され、長さは六〇・六cm(二尺)以上で、太刀よりは一〇cmくらい短い。

日本刀が「折れず曲がらず」を満たすのは鍛えによってで、美しさは焼入れの技術によって生ずる刃紋に代表される。刃紋は多様な種類があり、その造形の見事さは見ていて飽きない。現存する国宝・重要文化財の七割は備前刀で、刀身三m二七cmの大大刀もある。

承元の頃(一二〇八年)福岡一文字派始祖則宗は、後鳥羽上皇より菊紋と一の字を切ることを許された。一文字派の名の起りである。

人相書 国定村 無宿 忠次郎
当寅三拾才余
一 中丈殊之外太り候方

- 一 顔丸く鼻筋通
- 一 色白き方
- 一 髪大たふさ
- 一 眉毛こく其外常舛角力取共相見申候

これは天保十四年(一八三四)に配布された国定忠治の指名手配書である。「国光が鍛えし業物」：「片岡千恵蔵のすつくと立った姿が目に見浮かぶ(今年忠治の一五〇回忌である)。「今宵の虎鉄は血に飢えている」の名セリフ、最期が哀しい近藤勇：。「新撰組血風録」に近藤勇と土方歳三と沖田総司が刀身並べてみる場面がある。虎鉄は江戸新刀の代表工、長曾祢興里の入道名で、最初は古鉄といったが、中国の故事にちなんで改名したとある。土方は和泉守兼定を持ち、沖田は刀砥ぎ屋で借りた菊一文字の則宗である。三人の刀を評し、怒味と無骨味をもつ、歯をむいて戦場稼ぎに駆け回っている野武士、神韻縹渺として細身で品がある、と司馬遼太郎は書いている。

先日、東千代之介が亡くなって私

の心の東映は終わってしまった。一昨年、京都映画祭のシンポジウムのゲストは東千代之介と桜町弘子だった。東映に勤めていた息子に「録音してきて」と言ったら「母さん悪い。俺ビートたけしの方申し込んだから」と断られてしまった。

子供の頃二本立て二十円で見た映画に「妖刀村正」というのがあった。村正は切れ味よく三河武士に愛用されたが、それがかえって仇になり、「妖刀」という不名誉な名前を冠せられることになったが、その原因は徳川家にあると：。

①家康の祖父松平清康が阿部弥七郎に二尺七寸の村正で背後から斬り伏せられた。

②家康が少年時代、村正の小刀で怪我をし、たいへん痛んだ。

③家康の嫡男、信康が切腹を命じられた時、介錯した刀が村正だった。

④家康が織田信長が敵将を突いたという槍を見ているうち、その槍で指を負傷し、これが村正の作だった。

再々の不幸をもたらした村正を家康は納戸方に対して、すべて取り捨てよと命じ、このことが発端となつて、村正を差すことは遠慮する風が生じ、さらに誇張され、村正佩用は禁止されたと思ひ込むようになった。歌舞伎でも、村正は血を見ねば納ま

らぬ、持ち主に崇るなど拡大解釈され、それが村正に対する恐怖感を強めていったようだ。物にも心はある。歴史上の人物の所持した刀は今も彼らの生命を受け継いで眠っているに違いない。

原稿を書くため図書館や古本屋へ資料探しに行き、目についたのは江戸時代の本ばかり。とても面白く、つい寄り道をしてしまった。中世の福岡に戻ろう。

福岡城は建武年間(一三三四〜三八)、赤松氏の支配下にあった。その後、足利尊氏が足利直冬追討の途中、中四国勢の到着を待つ時に、この城を本陣として四十日ほど滞在した。



備前福岡城跡

嘉吉元年（一四四二）山名教之は赤松氏を討ち、要害として城を整備した。ところが、文明元年（一四六九）には、また赤松氏に奪回される。その後、再三の攻防が繰り返され、大永年間（一五二一〜二八）の大洪水により廃城となってしまうのだ。

古戦場は好きである。耳をすまし、目をとじると、ときの声や刀の音、陣太鼓やホラ貝が聞こえてくる。私の立っている場で、戦支度をした武士が、はやる心をおさえて待っていたり、瀕死の重傷を負った若い足軽が「ああ、これで死ぬのか」と涙を流していたりしたのだ。

福岡の市の鎌倉・室町時代に福岡庄の吉井川流域につくられていた市場で美作国の特産物や伊部焼などを商っていた。天安元年（一二九九）の「一遍聖絵」には、福岡の繁栄ぶりが描かれており、建徳三年（一三七〇）頃の紀行文にも

「家ども軒を並べて民のかまどにぎわいつつ、まこと名にしおついたり」とあって、福岡千軒といわれて山陽道きつての商都として栄えた。

戦国末期、宇喜多直家について福岡の多くの商人も岡山へ移転し、現在の表町あたりに住んだらしい。その後、天正十九年（一五九一）の大洪水で福岡市は壊滅的な被害をこう

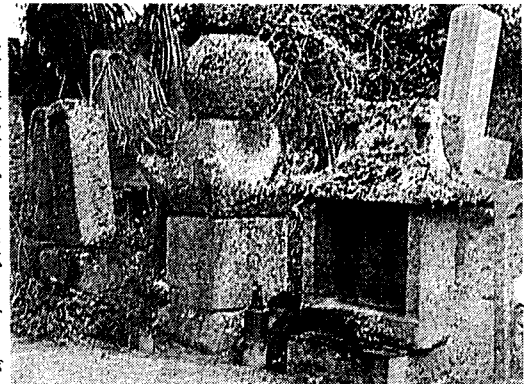
むる。いまは往時を偲ばせる石碑が、時の証人として跡を守っている。ゆつくり歩いて日蓮宗妙興寺へ。境内には黒田官兵衛の曾祖父高政の墓と宇喜多直家の父、興家の墓がある。りっぱな墓である。興家は父の能家が自害した後、直家を連れて頼へ逃れ、その後福岡の豪商、阿部善定に匿われ、娘との間に男子二人をもうけた。

「直家が好きな人いますか」
会長の声の手を挙げたのは、若い馬屋原さん。梟雄といわれる彼を好きな理由をいつか聞かせて下さいね。整然と造られた市の中の七つ井戸。各小路に一つあり、生活・防火用水に利用されていた。

「平田さん、メダカよ、ここ」
「えっ、どこ？本当だ」



福岡の市跡



宇喜多興家の墓

近く澄んだ小川には、メダカがスイスイ。いい所に住めてよかったね。

服部廃寺跡、花光寺山古墳、新庄天神山古墳、丸山古墳、須恵古代館、築山古墳：と盛りだくさんに見学。最後に備前南大窯跡を見に丘に登る。国指定史跡である。備前焼の同業者が共同して使用したもので、江戸時代から明治時代まで使われていた。うず高く積み上げられた破片の上を葛の蔓と花が（せっかく作られながら生きられなかつた彼らを）やさしく被つていた。苔のついた二片ほどを記念として持ち帰った。

種本さん、平田さん、それに会長や出内先生のお話まで聞けて、本当に楽しい一日でした。

七森さん、「結婚おめでとう」

古墳部会評議員の七森義人さんが、十月二十八日ご結婚なさいました。お相手は大橋里美さん。二人は知人の紹介で知り合い、交際約一年でゴールイン。みなさん、今度七森さんに会ったら「この幸せ者！」といっただけあげましょう。

会報九九号の原稿募集

会報九九号は二月十日発送予定
原稿締切 一月二十日(土) 必着

編集時間の都合で掲載できない場合がありますので早めにお送りください。原稿は一号につき一人一本に限りませう。

本文「一行一六字×一二〇行」でちょうど一ページです。以下三二行毎に一ページの一段になります。
四〇〇字詰原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。皆様の方作を期待しております。

今回は予算の都合上、二ページ以内でお願いします（依頼原稿は例外）。皆さんの会報です。身近な話題でもOK。どしどしお寄せ下さい。

史料紹介

世尊寺定成筆

平行政願文

木下 和司

大富山のバス例会で平田さんから会報の原稿を依頼されて何を書こうか迷っていたのですが、今回は史料の紹介をしようと思います。備後の国人杉原氏に興味のある方には興味深い史料だと思います。

その史料は鎌倉時代中期に書かれた法要の願文で、現在は国の重要文化財として東京国立博物館に保管されています。

この願文の書き手は有名な三跡の一人、藤原行成の子孫で、鎌倉時代を代表する能書家の一人である世尊寺定成です。また、願主は平行政という人物であり、行政が祖父平政の十三回忌にあたってその菩提を弔うために作成したものです。

平行政願文は江戸時代につくられたと思われる桐製漆塗の箱に納められており、その表書には墨書で

「佛語軸物 平行政行脚」と書かれています。蓋裏には同じく墨書で

「世尊寺定成朝臣真跡」

とあります。興味深いのは箱の内側に納められた別紙に次の記述があることです。

諸家大系図 四

杉原佐渡守行政 六波羅奉行

法名金剛

なぜ「杉原」が平行政の苗字として書かれているのでしょうか。「諸家大系図」なるものは現存していないようですが、その答は「尊卑文脈」に見い出すことができます。「尊卑文脈」で杉原氏の項を引くと、そこに

佐渡守平行政の名を見つけることができます(図1)。また、行政の祖父として政平の名も認められ、政平が三重姓の祖とされる人物であることも分かります。さらに、政平の父宗平は平光平、即ち杉原光平の兄にあたる人であることから、杉原氏と三重氏は同根の一族であることが明確になります(図1)。

さて、いよいよ願文の内容を紹介しましょう。杉原氏の家系について興味深い点が二つ書かれています。第一点は三重流の家祖、即ち同根である杉原氏の家祖に関する記述です。願文の該当部分の釈文を以下に引用しましょう。

●始祖ヲ尋ヌレバ李部竹園ノ遺孫ヲ恭ウシ

つまり三重氏は自らの祖先を「李部・式部」卿に任じられた「竹園・天子の子孫」だと言っています。これは、伊勢平氏の祖である桓武天皇の子息、葛原親王が式部卿に任じられたことを指しています(図1)。したがって、三重氏と同根である杉原氏も正しく桓武天皇の血を引き、平維衡の家祖とする伊勢平氏の家系だということになります。

第二点は鎌倉時代の三重氏の立場に関する記述です。釈文を以下に挙げます。

●譜弟(第)ヲ訪ヌレバ柳宮蘭奇ノ奇人ヲ示ス。久しく前鋒武備ノ名家ヲ粟ケ、右筆軍議ニ候シム

つまり、三重氏の家系は「柳宮・幕府」の奇人、即ち鎌倉幕府の御家人であり、武名の高い家系であって幕府の右筆、即ち、奉行人であったと語っています。ここで三重氏と同族であった杉原氏も御家人であり、かつ奉行人であったと推測されます。この推測は鎌倉時代の訴訟文書を調べることで簡単に裏付けられます。

えられる民部八郎及び曾孫親綱には幕府奉行人であった確証があります。ここまでに「平行政願文」から得

られた知見をまとめてみると、杉原氏は桓武平氏の直系で武名の高い家系であり、鎌倉時代には幕府奉行人に任じていたことになりました。

最後に、この願文の中で三重氏・杉原氏の家系がただものではなかつたことを示している記述について考えてみたいと思います。問題の釈文を以下に挙げます。

●斯二外ニ寵愛ノ貴女有リ、幽儀(政平)ノ養君為リ。(中略)既ニ懿氏龜トノ吉祥ニ協ヒ、早ニ舜官龍作ノ室家ニ配ス

ここでは、幽儀(政平の法名)の娘の嫁ぎ先が言及されています。それは、「懿氏・家柄の良い氏族」の一員で、「舜官龍作・中納言」に補任された人物だと書かれています。ここには具体的な一族は書かれていませんが、「尊卑文脈」にはその名が書かれています。図1をもう一度見て下さい。政平の娘の横には「太政大臣(源)定實公妾雅房卿母」と書かれています。つまり、政平は妾とはいえ将来、太政大臣となる資格を持っていた人物にその娘を嫁

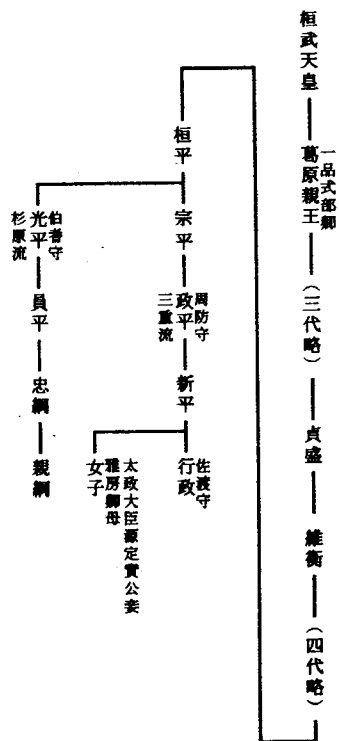
がせているのです。身分制度の喧し
かった当時のことを考えると、大し
たものでしょう。

では、源定實公、雅房卿とはどの
ような人物なのでしょう。その答
は、「公卿補任」と呼ばれる書物の中
にありました。「公卿補任」とは
従三位以上に叙せられて公卿となっ
た人達を年代順に整理したもので、
現在でいえば「紳士録」にあたる書
物です。「公卿補任」弘安元年(一二
七八)の項に、以下の記述がありま
す。

●従三位 土御門源雅房十七
大納言定實卿一男。母家女房(故
入道周防守平政平女)

つまり、政平の娘は土御門家とい
う源姓の家系に女官として仕えてい
た時に、定實に見初められてその側
室となり、雅房と名付けられる子供
を設けたこととなります。そして、
雅房はわずか十七歳で公卿に任じら
れています。従三位を現代の会社組
織に当てはめれば、平取ながら大会
社の取締役に相当します。若千十七
歳で大会社のボードメンバーに子供
を送り込める土御門家とは、当時の
公家社会でかなりの実力を持った家
系だということになります。

図1 杉原氏・三重氏略系図



現代人は、源氏の代表といえば源
頼朝のイメージが強いために、すぐ
清和源氏を思い浮かべます。でも公
家社会で源氏といえば、その嫡流は
村上天皇を祖とする村上源氏です。

土御門家は、村上源氏の嫡流に属す
る家系です。定實の曾祖父は、頼朝
にとつて最も手強いライバルであつ
た源通親です。通親の権勢には並び
立つものがなかつたために、「源博陸
(はくろく)」と呼ばれました。「博
陸」とは関白の異称です。関白に任
じられる資格を持たない源氏の通親
が一人で政治を行う姿を、世の人は
「源博陸」と唱えました。また定實
の祖父は、北条泰時を動かして姻戚
関係にある後醍醐天皇を擁立した土
御門定通です。

つまり土御門家は、当時の公家社
会の中心に位置した家系です。こん
な格の高い家系に女官といえ、
娘を仕えさせることができる三重氏
の家系は、ただものでは無かつたこ
とになります。そうすると三重氏と
同根である杉原氏も単なる武家では
なく、京都の公家社会と深い繋がり
のあつた家系だつたと考えられます
しかし、このお話は武士の発生に關
する話題と絡めて、また別の機会に
譲りたいと思います。

- 古墳講座VII**
〔実施要項〕
- 《座長》山口哲晶さん(部会長)
 - 《開催日》十二月二三日(土)
 - 《時間》午後七時〜午後九時
 - 《会場》中央公民館会議室
 - 《会費》資料代として一〇〇円程度
- 『古事記』を読む**
〔実施要項〕
- 《座長》平田恵彦さん(副部会長)
 - 《開催日》一月十三日(土)
 - 《時間》午後二時〜午後四時
 - 《会場》ふくやま市民交流館
 - 《会費》資料代として一〇〇円程度
- 『備後古城記』を読む**
〔実施要項〕
- 《座長》小林浩二さん(部会長代行)
 - 《開催日》一月二十日(土)
 - 《時間》午後七時〜午後九時
 - 《会場》福山市中央公民館
 - 《会費》資料代として一〇〇円程度
- 歴史小説読書会**
〔実施要項〕
- 《座長》種本美さん(歴史研部会長)
 - 《開催日》二月三日(土)
 - 《時間》午後二時〜午後四時
 - 《会場》福山市中央公民館(予定)
 - 《二月の課題図書》
- 『北条時宗』浜野卓也著
PHP文庫 六六七円

知られざる維新史

残念様由来

後藤 匡史

佐伯郡大野町といえば、あの戦国三奇襲戦としてあまりにも有名な、弘治元年（一五五五）毛利元就が四千の兵で、陶晴賢二万の大軍を厳島で破った戦が想起される。この時、元就はこの地から船出した。

また、ここは幕末、第二次長州征伐（山口では四境戦争という）最大の激戦地、芸州口四十八坂の戦いがあったところでもある。

平成十一年九月二三日、二四日、西日本を襲った集中豪雨の高潮による山陽本線大野浦駅・玖波駅間の災害復旧に行ったときのことだった。

私は踏切監視人として、垣ノ浦踏切についていた。最初のうちはよくわからなかったが、夜が明けて小さな祠が目に入った。その横の看板には神社の由来が書いてあった。看板の書かれたのは昭和五十年（一九七五）で、おおよそ次のようにあった。

今から百十年前、長州征伐の際、丹後国宮津藩士、依田伴蔵が和平交渉に向かう途中、四十八坂において長州軍に狙撃され、ついに和平成ら

ずに「残念」の一言を残して斃れたことにより、爾来、「残念様」といわれ、依田神社としてその霊を祀る。

残念の一言、四隣に伝わり、芸州陽山火煙塵飲まる。

維新の大業何に就ける。和睦の勲功は此の人を推す。

慶応二年（一八六五年）丙寅七月二日 殉難
宮津藩士 依田伴蔵の墓北約五丁

どうやら残念様こと依田伴蔵の墓はこの小祠の北約五〇〇mのところにあるらしい。

その年の十二月四日の日曜日、広島駅から電車に乗り、三十分ほどして大野浦駅に着いた。それから県道に沿って西に二キロほど歩くと山陽自動車道の袂に出る。そこに自動車道に架かる「残念橋」という小橋がある。これを渡るとすぐに西国街道（旧山陽道）におつかり、そこから五〇mほど歩くとお堂がある。大野浦駅から一時間ほどで現地に着く。

残念様お堂

灯籠―明治四年辛未 六月吉日

香台―昭和十二年一月吉日

才女

お堂―昭和四十六年十一月十九日

大安吉日 遺族代表 依田 雅男



国前寺境内 幕府方歩兵差図役 友成求馬の墓

依田伴蔵遺詠

忘れめや

胡蝶の夢のつかのまも

花にやどりし春のめぐみを

近くに吉田松陰腰掛けの石がある。大老井伊直弼の安政の大獄で囚われの身となって江戸に護送される途中、西国街道随一の難所、四十八坂峠にて一息ついた所、海に臨み三境の地と言った名勝地である。

親思う心に勝る親心

今日のおとずれ何と聞くらむ

生まれ故郷大島の方へ向かって松陰が断腸の思いで詠った歌だ。

これに関連して、私のいる広島市東区光町に日蓮宗の国前院というお寺があるが、ここはその戦の時、幕府の武器弾薬庫になっていたところだ。ここに幕府方陸軍奉行、竹中丹後守と西之丸下歩兵差図役、友成求馬藤原久微の墓があるので紹介する。

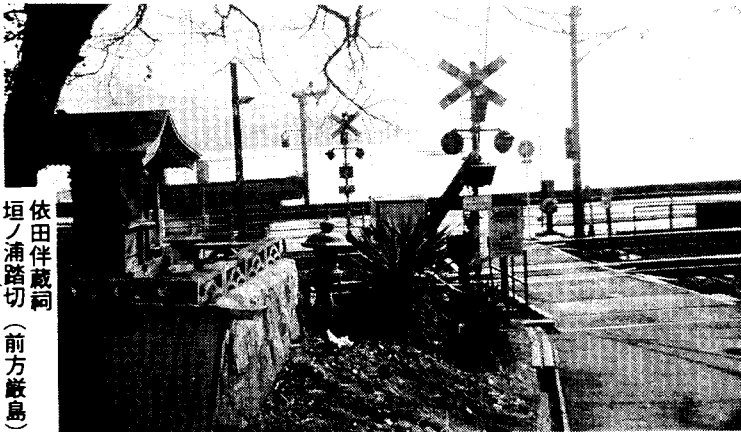
雄明院微忠顕久日忍居士

歩兵差圖役頭取友成求馬藤原久微之墓慶應二丙寅六月十九日長防討

手之節於芸州佐伯郡大野庄

城山麓速討死 行年廿五

分骨當土江埋葬



依田伴蔵祠 垣ノ浦踏切（前方厳島）

父邦右衛門安良江賜慶詞墓文

六月十九日

大野村戦争之節粹求馬抱身命□発
勇戦利柏成透討死改候□達

上聴格別忠節之旨 沙汰□

広島で茶毘に付して分骨、後、江
戸増上寺にて回葬

馬の塚―雲雀家馬之塚

(□は判読不能)

ちなみに、広島市にある寺で国前
院や国泰寺とあるのは、浅野家始祖
長政が豊臣秀吉と義兄弟だったとこ
ろから、秀吉の戒名「国泰寺殿太閤
相國雲山俊能」からとったといわれ
ている。

天下布武の城

平田 恵彦

なにかに憑かれたように近江に
通っていた時期がある。五、六年ほ
ど前のことだ。クルマでよく行った
し、しばしば電車でも行った。

僕はピンボーなので、クルマのと
きは夜のうちに出発し、一般国道を
ひたすら走った。宿泊費を節約する
ためにクルマで眠った。電車するとき
は当然青春きっぷである。こうして
浮かせた高料金や宿泊費や電車賃
で現地の資料や本を買うようにして

いた。このスタイルはいまでも基本
的に変わらないが、複数で史跡めぐ
りするときには、他の人にできるだ
け合わせるようにしている。ただ、
クルマで遠方へ行くときの早朝出発
(午前二時〜四時)だけはこれから
も譲るつもりはない。

数ある近江の中世・戦国期の史跡
でとくに印象に残っているのは、小
谷城跡・観音寺城跡・安土城跡だ。

小谷城は浅井長政の居城として有
名。数年前、会の一泊旅行で探訪し
たのは記憶に新しい。参加された方
はその素晴らしさをご存じだと思う。

観音寺城は近江源氏の雄、六角氏
の本城で、安土城の尾根続きの織山
にある。城としてはもちろんこちら
が古い。はつきりいつて探訪したと
きの衝撃はこの城が最も大きかった。
度肝を抜かれたといってもよい。郭
の数は少なくとも十、そしてそのす
べてが石垣造である。

以前にも書いたが、永禄十一年(一
五六八)信長に攻められたとき、六
角義賢(承禎)が惜しげもなく、し
かも一夜にして捨てて逃げたとい
うのが信じられない規模だ。城郭とい
うよりむしろ山上市といったほう
がいいのかもしれない。ただ惜しむ
らくは交通の便が悪く、郭のほとん
どは樹木に埋もれている。見学する

にはある程度の覚悟が必要である。

世に「中世四大山城」と呼ばれる
城があり、観音寺城と小谷城はこれ
に入っている。ちなみにあと二つは
みまこ氏の月山富田城、上杉氏の春日
山城で、四つのうちの二つまで近江
にあるのが面白い。ただ、安土城は
入っていない。それには理由があり、
これについてはあとで触れる。

安土城は織田信長の天下布武の拠
点で、清洲城、岐阜城に続く最後の
居城である。僕はこの城に五、六度
登っているが、初めてのときは青春
きっぷで、日帰りだった。

当時、安土城考古博物館と「信長
の館(セビリア万博日本館で復元さ
れた安土城天守を移築)」が開館し
て間もないころで、一般観光客も比
較的多かった。そのためだろう、博
物館と安土城との間を巡回する小型
バスが安土駅から出ている。が、い
まはない。プームが去り、採算が合
わなくなつて廃止されたのだと思う。
もともと、駅からゆっくり歩いても
博物館まで三五分、そこから安土城
の登り口までは十五分ほどだ。いに
しえを想い起こしながら歩くのには
ちょうどよい距離である。

二回目の時は錦ちゃん(佐藤錦土
さん)と一緒にクルマで行った。こ
の時は未森さん(大津市在住の会員。

古い会員なら誰でも知っている山城
マニア)に城内を案内してもらつて
くまなく見学することができた。

安土城はまた、城郭史上、新時代
を切り拓いた画期的な城として位置
づけられている。天正四年(一五七
六)、約五年の歳月をかけて完成した
この城に、城主の恒常的居館・政庁
としての天守(天主)が史上初めて
出現したのである。

城郭における天守の初現は、撰津
国伊丹城(「細川両家記」永正一七年
「一五二〇」条)、あるいは尾張国
楽田城(「遺老物語」永禄元年「一五
五八」条)ともいわれている。しか
し、この場合の天守は単に中心的な
櫓であり、戦時における司令塔とし
て築かれたものと考えられる。もち
ろん、安土城天守も非常時において
はその機能を果たす施設であること
には違いない。

しかし、安土城がそれ以前の中世
城郭と決定的に違うのは、平時にも
城主(信長)が天守に居住し、城下
あるいは領国支配の象徴となつたこ
と、政治的建築物となつたことであ
る。このような天守のある城を近世
城郭という。いま私たちは城といえ
ばふつう天守をイメージする。その
ルーツは安土城にあったのだ。
これに対して中世の城郭は、多く

の場合、峻険な山の頂部・山腹部に築かれ、いざ戦うときだけに籠もる施設（詰城）であった。いつてみれば、鎧や兜と同じく専守防衛のための建造物だ。平時には城番だけを置き、城主は山麓に館を構えてそこで暮らした。だからこそ城主は「御城様」ではなく、「御館（屋形）様」と呼ばれたのである。いまでも山裾に「土居（土井）」や「構」などの地名が残っているとろがある。こうしたところは、中世に領主の居館があった可能性が高い。

簡略にいうと、中世には領主は城外の館（ただし、館を館城ということがある）に住んだのに対し、近世では城の中に住むようになるということだ。この間、城に対する考え方が、大きく変わっているのである。僕は、中世の城郭は主に戦術的に、近世城郭は主として戦略的に築かれたと理解している。信長の時代はその過渡期・転換期にあたり、城郭史では「織豊期」と呼んでいる。安土城のような天守をもつ城郭の創造と職業軍人の創出は、信長以外の誰もなしえなかった。信長こそ近世の扉を押し開いた最初の人間である。この天下布武の野望の跡、安土城を来年早々に探訪する。多くの会員の参加を切に願う次第である。

新春青春きつぷの旅 信長の野望の跡、安土城に登る

二一世紀最初の行事は、平田さんの案内による新春青春きつぷの旅からスタートします。

今回の旅のメインは誰もが行ってみたいと思いつながら、なかなか行く機会のない、あの安土城跡です。電車に乗る時間は少々長いですが、もちろんそれだけの価値はあります。滋賀県まで往復してのこの会費は、青春きつぷならではの魅力です。

★主な探訪予定地

- ★安土城跡：信長が天正四年（一五七六）、五年の歳月をかけて完成した天下の巨城。金箔を施した瓦を始め、贅を尽くした装飾絵画で彩られた五層七重の天守閣だった。本能寺の変で焼失し、いまは往時を偲ぶ石垣が残り、その規模の大きさや伝えている。羽柴秀吉跡、徳川家康跡等も見学する。
- ★織田信長廟：安土城二之丸にある。秀吉が天正十一年（一五八三）に築いたもので、遺骨・太刀・烏帽子・直垂などを埋葬したと伝えられている。
- ★近江風土記の丘：安土町に建設された歴史公園。滋賀県下から移築された古建築三棟などがある。

★安土城考古博物館：近江風土記の丘にある考古博物館。織田信長と安土城に関する資料を多数展示するほか、弥生時代から古墳時代の生活様式を再現展示している。

★安土城天守閣「信長の館」：スペイン・セルビア博覧会（一九九二年開催）で原寸代に復元された安土城天守閣を収蔵・展示している。平成の名工・画家・学者が総力を上げて追究再現されたもので圧巻。

- ★セミナリヨ跡：信長の信頼を得ていた宣教師オルガンチノによって天正九年（一五八一）に創設された日本初の神学校跡。
- ★摺見寺三重塔：重文。享徳三年（一四五四）に建てられ、天文二四年（一九九六）に修築され、天正年間に信長が現在地に移築したと伝えられる。
- ★摺見寺仁王門：重文。元龜二年（一五七一）、甲賀の山中大和守によって建てられ、天正年間に信長が移築したと考えられている。
- ★沙沙貴神社：古代豪族狭狭城山君の氏神とされている。平安時代中期以降は近江源氏佐々木氏（六角・京極・尼子等）の氏神として信仰されてきた有名な神社。

*探訪地は時間の都合により変更・省略することがあります。

【実施要項】

- 《期日》二〇〇一年一月七日（日）
- *雨天の場合は翌日の一月八日（月、成人の日）に延期します。
- 《集合時刻》午前五時（厳守！）
- 《集合場所》JR福山駅改札口前
- 《参加費》 会員 四三〇〇円
一般 四八〇〇円
- （青春きつぷ代金・安土城考古博物館入館料「三〇〇円」・信長の館入館料「五〇〇円」・傷害保険料・資料代含む）
- 《募集人数》四〇名（申込先着順）
- 《講師》平田恵彦さん（歴史研副部長）
- 《受付》平田さん宅へ電話で
 Ⅷ〇八四九―二三―三七八一（午後九時～午後十時、厳守！）
- 《受付開始日》本日から受付開始。
- 《その他》弁当と飲物を持参のこと（ただし食堂もあります）。歩きやすい服装・靴でご参加下さい。季節がら防寒の用意は十分にしておいてください。
- *歩く距離は七キロ程度です。
- *JR福山駅到着予定時刻は午後九時三十分です。
- *キャンセルは一月五日（金）まで、それ以後のキャンセルは、たとえ参加しなくてもキャンセル料として三〇〇〇円いただきます。

創立二十周年祝賀会開催

去る十月二一日(土)、備陽史探訪の会創立二十周年祝賀会が福山グラウンドホテルロイズパレスで華やかに開催され、会員および一般参加の九五名と来賓一〇名の計一〇五名が出席しました。

まず、田口会長が挨拶し、この二十年の会の発展はひとえに会員の協力によるものと感謝の意を表し、次の十年へ向けて新たな一歩を踏み出したい、と決意を表明しました。

続いて、永年の会の活動に功勞のあった会員七名(網本善光さん・出内博都さん・佐藤秀子さん・篠原芳秀さん・杉原外志子さん・中西晃さん・広川茂夫さん「五十音順」)を表彰しました。会長が功勞者一人ひとりに対して深々と頭を下げ、記念品を渡していたのが印象的でした。

引き続き来賓の三好章福山市長、門田峻徳広島県会議員から祝辞を賜りました。そののちアトラクションとして音楽家の羅酒新さんが中国古河「と」遙族舞曲」素晴らしい演奏に出席者全員から感嘆の声があがりました。

乾杯の発声は、岸田裕之(ひろし)之(の)広島大学教授にお願いしました。この後、歓

談に移り、各テーブルで大いに盛り上がり、話に花が咲きました。カラオケ大会も始まり、一人で数曲も歌う人も。そして参加者全員でこれらの会のいつその発展を心から誓い合って午後八時十五分つがなくなるとお開きとなりました。

なお、祝賀会に先立ち午後二時から広島県立博物館講堂で岸田裕之の先生をお迎えし、二十周年記念特別歴史講演会「備陽地域における戦国時代の城と合戦」を開催しました。会員・一般参加者約二八〇名が出席し、県博講堂は超満員となりました。会員の皆様のご協力の賜物です。

『ふるさと探訪』発行・増刷

備陽史探訪の会創立二十周年を記念して「ふるさと探訪」福山周辺の史跡めぐり十五選」を発刊されました。会員の皆さんにはすでに無料送付しましたのでご存じだと思います。合計千部印刷しましたが、好評でこのたび新たに五百部増刷しました。今後会の諸行事において一冊一五〇〇円で販売(十冊一括購入してくださった方には一冊一二〇〇円に割引)いたしますので知人・友人にお勧めくださるようお願いいたします。

事務局日誌

十月十四日(土)

▼午後二時「古事記」を読む」参加二六名。於ふくやま市民交流館。
▼午後七時「備後古城記」を読む」参加一三名。

十月二一日(土)

▼午後二時、備陽史探訪の会創立二十周年記念講演会「備陽地域における戦国時代の城と合戦」。講師は岸田裕之先生(広島大学教授)。会場は超満員、参加約二八〇名。於広島県立歴史博物館講堂。
▼午後五時半、備陽史探訪の会創立二十周年記念祝賀会。参加一〇五名(三好市長等来賓十名、会員等九五名参加)。大いに盛り上がりつて次の二十五周年へ。遠方から末森清司さん、足立捷一郎さんも参加。於福山グラウンドホテルロイズパレス。

十月二八日(土) 午後七時。「古墳講座Ⅷ」参加十三名。
十一月五日(日) バス例会「月の輪古墳に登る」。大平山登山はやはりきつかった。講師は網本善光さん・安原登佳さん。参加三八名。
十一月七日(火) 役員会参加一七名。
十一月十一日(土) 午後二時「古事記」を読む」参加二三名。於ふ

くやま市民交流館。
十一月二三日(祝)

▼特別徒歩企画「神楽月、藁塚野辺をひた歩く」。講師は平田恵彦さん。参加三九名。
▼午後七時。「備後古城記」を読む」参加一二名。
十一月二五日(土)

▼午後二時、第十一回郷土史講座「福山―歴史の謎―」。講師は田口義之会長。さすが会長、参加は六三名。於ふくやま市民交流館別館。
▼午後七時。「古墳講座Ⅷ」参加十二名。
十二月二日(土) 歴史小説読書会。

課題図書は永井路子著「美貌の女帝」。参加九名。於ふくやま市民交流館。
*とくに断りがない場合は会場はすべて福山市中央公民館です。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

平成十三年度総会開催

来年は新世紀、二十一世紀を迎えます。備陽史探訪の会も新たな十年に向けての出発の年、重要案件が多数ありますので、ぜひご出席くださいますようお願いいたします。

【実施要項】

《期日》

二〇〇一年一月二十八日(日)

《時間》

午後三時四十分～午後五時

《会場》

ふくやま市民交流館

福山市丸之内一―九一五
TEL〇八四九―三二―三三〇〇

(福山駅北口から徒歩約三分)

《主な案件》

・平成一二年度決算および活動報告
・平成一三年度予算案および活動案

《出席申し込み》

同封のハガキに氏名・電話番号と必要事項をご記入の上、一月二三日

(火)までにご返送ください。

《委任状提出について》

総会ご欠席の方は、必ず、ハガキ裏の委任状にご記入の上ご返送ください。

委任状提出・総会出席状況によつては総会が不成立になる場合がありますので、よろしくご協力をお願いいたします。

総会記念特別歴史講演会 戦国期備後国と

出雲尼子氏

総会記念講演会には、いま最も注目を浴びている新進気鋭の歴史学者、長谷川博士先生を講師にお招きします。先生は中国地方の中世・戦国史に新説を提起されています。戦国時代ファンは絶対に関き逃せませんね。ぜひご参加ください。

【実施要項】

《講師》

長谷川博士先生
(広島大学文学部助手)

《期日》

二〇〇一年一月二十八日(日)

《開会時刻》

午後一時三〇分

《会場》

ふくやま市民交流館

《会費》

無料です。

《講演の概要》

中国地方の戦国時代史は、ふつう周防大内氏と出雲尼子氏の二大勢力の抗争から、毛利氏によるそれらの打倒へという形で整理される。「一五二〇年、出雲尼子氏はすでに十一ヶ国に勢力を及ぼす巨大な大名権力であり、一方の周防大内氏も室町期以来六ヶ国以上の領国を有する西国屈指の大手護」。

これが通説である。超大国に挟まれた弱小勢力毛利氏が、苦心惨憺しながら戦国の覇者となつていく過程は、物語としても面白い。

しかし、右の通説が史実でないとしたら、どうなるだろうか。通説を生み出した論拠を明らかにしながら史実としての中国地方の政治過程のなかに、備後国を位置づけなおしてみたい。

【講師略歴】

一九六五年島根県生まれ。一九九四年広島大学大学院博士課程修了。現在、広島大学文学部助手。博士(文学)。

専攻は、日本中世史、とくに中国地域・山陰地域の戦国期大名権力と地域社会構造に関する研究。主な著書は、「岡山県地域の戦国時代史研究」(共著) 広島大学文学部、「古代文化叢書3 富家文書」(共著) 島根県古代文化センター、「出雲古志氏の歴史とその性格」(出雲市古志公民館・古志史探会)、「鞆の浦の歴史―福山市鞆町の伝統的町並に関する調査研究報告書I―」(共著) 福山市教育委員会、「戦国大名尼子氏の研究」(吉川弘文館)。(註)「講演の概要」と「講師略歴」は長谷川先生からお送りいただいたものです。

新世紀会で盛り上がる!

【実施要項】

《期日》

二〇〇一年一月二十八日(日)

《時間》

午後五時三〇分～七時三〇分

《会場》

備後遺族会館
福山市丸之内一―九一七

《会費》

三五〇〇円

《申し込み》

総会と同様です。

《キャンセル》

新世紀(新年)会のキャンセルは二六日(金)の夜までお願いいたします。この後のキャンセルは、折詰代金として二五〇〇円いただきます。

★総会・記念講演会と会場が異なりますのでご注意ください。また、講演会・総会・新世紀会ともクルマでのお越しはご遠慮ください。

【編集後記】

二十周年を迎えて成人となった備陽史探訪の会、会の運営でも本当に大人になったといえるでしょうか? 二十一世紀はもつと素晴らしい会にしていきたいですね。(整座亭主人)

備陽史探訪の会事務局 ☎三〇六六

福山市多治米町五一―九一八

☎〇八四九(五三)六一五七